

1. 研究の背景・目的

【研究の背景およびこれまでの経過等】

一昨年、本学人文社会科学研究所の共同研究において、言語教育の立場から、他言語教育、特に日本語を母語としない人たちに対する日本語教育の取り組み方を中心に、従来とは異なる視点から、有効な英語教育の方法や効果的な教材の選定等について検討した。その過程で、学生の英語に対する関心のありようを詳しく知るためのアンケートを実施して、学生の興味に応じつつ、学生の意欲を引き出すための授業方法を模索した。そこで見られた、基礎的な英語力の不足を補いたいという学生の意向は、2年生に対する「英語Ⅱ」（2年次選択科目）の履修希望調査においても明らかで、基礎英語に対する希望者は、急遽2クラス編成にしても応えられない状況であった。

このような状況を受け、2010年度から、英語の基礎学力養成の改善を図るために、試行的に1年次の英語の前期は、前年度よりもクラスの人数を少人数化すると共に、担当者には、最初の授業時間において、「英語ⅠA」では、英語で用いられる主な子音・母音の発音、語強勢や、抑揚について、「英語ⅠB」の授業では、目的に合わせた適切な辞書の引き方等の指導を実施することを申し合わせている。

【研究の特色・期待される効果】

本研究では、これらの改善点（少人数化等）の効果客観的に分析することに加え、学生と担当教員に対するアンケート調査等を実施することにより、一般教育科の英語教育の方向性に関し、特に以下の3点から具体案を検討することとした。

- (1) 適正なクラスサイズ
- (2) 効果的な教材・指導方法
- (3) 必要最低限の指導内容

また、研究の過程で、新たな改善点を発見することと、その予想される効果についても検討した。

2. 実施内容

【予備調査】

上述の検討課題（1）～（3）に取り組むための準備として、2010年度入学生（英文学科と国際文化学科の学生を除く）に対し、前期の授業期間中に、「現在の（各自の）英語力に関してどんな課題を感じているか」、「大学での英語学習に何を期待しているか」等について、アンケート調査を行い、学生の状況を確認した。

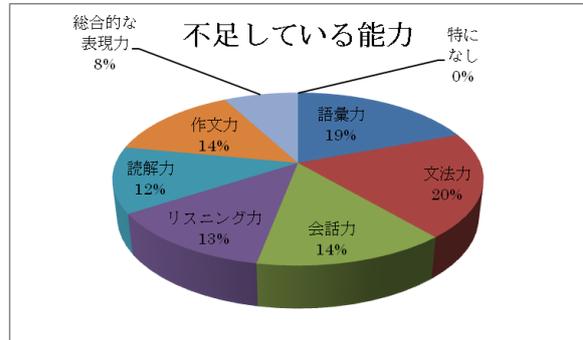


図1：英語に関し不足していると感じる能力

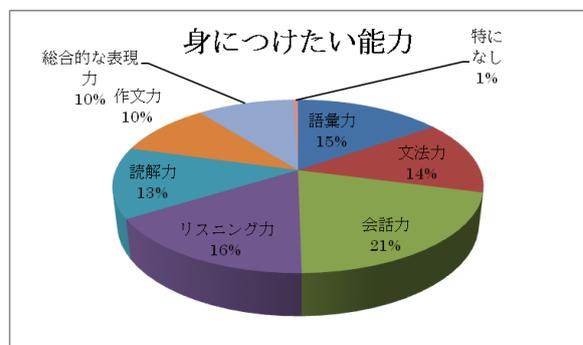


図2：大学において身につけたい能力

まず、学生が入学時点での自分の英語力においてどのような自己分析を行っているかという点については、図1のアンケート結果（複数回答可）が示しているように、「読む・書く・聞く・話す」、および「語彙力」といった英語の基本技能のすべてに関して力不足を感じていることが確認できた。

一方、大学での英語学習において今後身につけたいと感じる能力について調査したところ、自分に不足している能力（図1）を全体的に補いたいと感じていることが確認できるが、細かく見ると、文法力、作文力の割合がやや減少し、リスニング力、および会話力の割合が高くなっていることが分かる。この点から、学生の意識としては、英語力と言えば、まず「会話力」をイメージするという一般的な学生の傾向が出ているように思われる。このことから、『(英語の) コミュニケーション能力を高める』には、『(英) 会話』だけやればいい」という、言語学習によくある誤解（錯覚）をしている学生が本学にも多いということに留意する必要があることが確認できた。したがって、指導内容のあり方を検討する際には、学生にはまず、「言語は文の型（あるいは、構文）、音、意味の集合体である」という点をしっかり認識させ、会話力と他の能力（文法力、読解力、作文力、リスニング力、語彙力等）とは切り離せないのだという点を十分に理解させる必要があることが見えてきた。

【適正なクラスサイズの検討】

本学一般教育科目の英語 I A（スピーキング・リスニング中心の科目）と、英語 I B（リーディング・ライティング中心の科目）を指導するため

の最適なクラスサイズについて、指導教員（非常勤講師を含む）と学生の意識調査、および授業効果の確認を通して、検討することとした。

また、2009年度まで、英語 I A、英語 I B は通年科目であったが、2010年度から本学が Semester 制へ移行したことにとともない、半期科目（前・後期とも科目名は同じ）となったことを利用し、前期のクラスサイズを従来（60名前後）の半分、つまり、30名前後とし、後期の場合は、従来通りの60名前後とすることで、授業の成果等についての比較調査を行えるようにした。

調査方法は、まず学生に対しては、各学期末（前期：7月、後期：1月）に、各クラスにおいて「授業に関するアンケート」を実施し、以下の質問項目により学生の認識を調査した。

<クラスサイズについての質問>

Q1：1クラスの人数（受講者数）は適切でしたか？（前期・後期）

Q2：英語の授業に関して、1クラスの人数は何人くらいが最適だと思いますか？（後期）

<授業で得られた成果についての質問>

Q3：先生の説明はよく理解できましたか？（前期・後期）

英語 I A（前期）：1クラス約30名

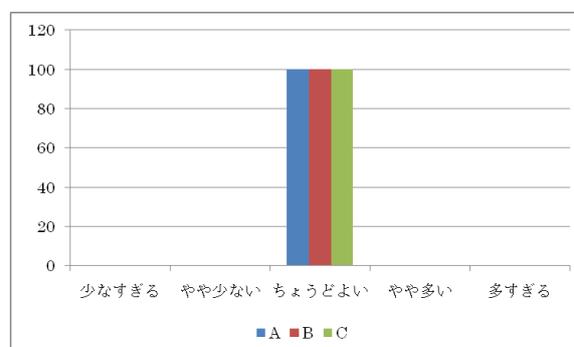


図3：1クラスの人数（受講者数）は適切か？

(*図3～図6において、縦軸は回答した学生の割合を、横軸は1クラスの人数に対する学生の認識を示し、凡例A～Cは異なる3つのクラスを示す。)

英語 I B (前期) 1クラス約 30

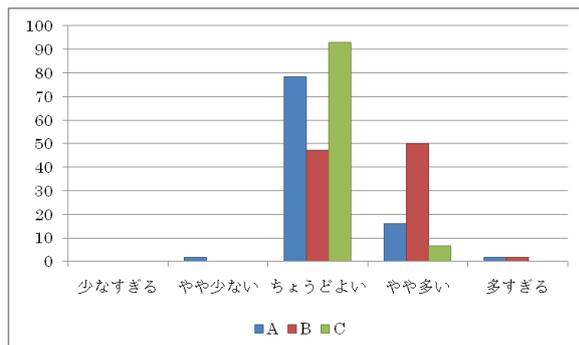


図4：1クラスの人数(受講者数)は適切か？

英語 I A (後期) 1クラス約 60

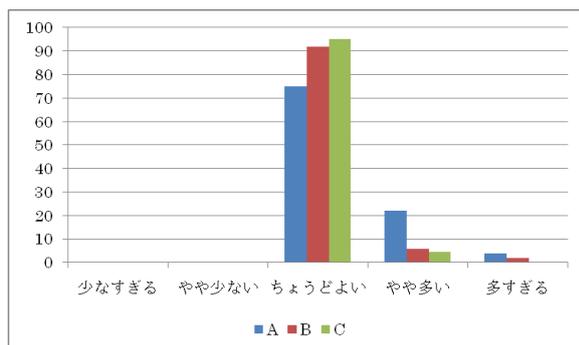


図5：1クラスの人数(受講者数)は適切か？

英語 I B (後期) 1クラス約 60

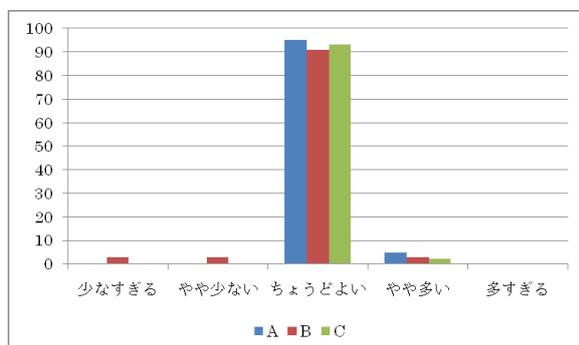


図6：1クラスの人数(受講者数)は適切か？

まず、Q1 についての結果を図3～図6により示

す。これらのグラフは、各授業を履修した学生が、クラスサイズに対してどのような印象を受けたかについてのアンケート調査の結果を示している。前期と後期の結果(図3、4と図5、6)を比較してみると、「やや多い」と回答した学生が若干は認められるものの、学生が実感したクラスサイズに関する印象は、前期(30人前後)と後期(60人前後)で有意差はなく、特に不満や不都合は感じていないように思われる。また、授業の種類(英語 I A (スピーキング・リスニング)と英語 I B (リーディング・ライティング))による差も明確な傾向は示していないように思われる。これらの結果は、学生は「小クラスの授業を望んでいるのではないか」という我々の予想に反するものであった。

ただし、これらの結果は(必ずしも授業で得られる成果という点から判断しているとは限らず)あくまで学生がどのような印象を持ったかという結果を示している可能性があり、アンケートには次のようなコメントが確認された。

<ちょうどよい>という回答について

- ・高校の時のクラスと同じぐらいで良かった。
- ・授業中に指名される回数が多くならず、ちょうどよい人数だと思った。
- ・同じ(学科の)クラスの人が一緒に学習できたので良いと思った。(このコメントは後期のもので、後期は各学科のA・Bクラス等を基準にクラス編成を行ったことを反映しているようである。)

一方、Q3 についての調査結果は、ある程度の傾向を示しているように思われるが、紙面の都合上、英語 I A (スピーキング・リスニング) についてのみ、学生の授業内容に対する理解度を前期

と後期で比較した結果を示すことにする。(図7、8において、縦軸は回答した学生の割合を、横軸は授業の理解度、凡例 A~B は異なる3つのクラスを示す。)

英語 I A (前期) : 1 クラス約 30 名

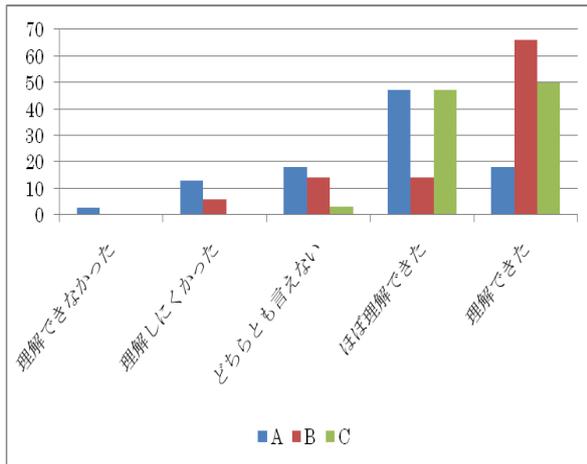


図7：先生の説明はよく理解できましたか？

英語 I A (後期) : 1 クラス約 60 名

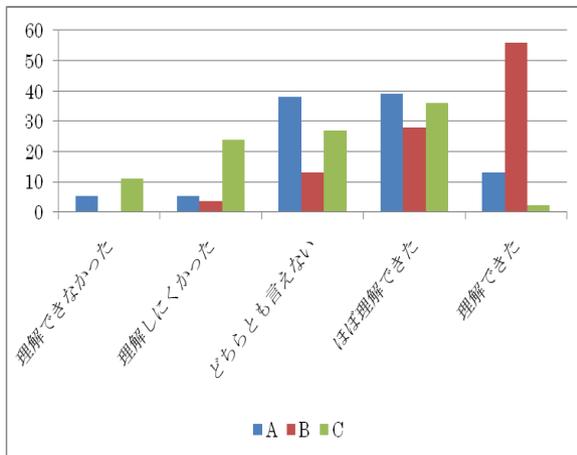


図8：先生の説明はよく理解できましたか？

クラスサイズの小さい前期の方が、後期の場合より、授業内容に対する学生の理解度（理解できたと感じている学生の割合）が上昇する傾向を示しているようであり、図3～図6の結果があいまいだったのに比べ、適正なクラスサイズを検討する

上でより有益な調査方法であるように考えられる。また、各授業の担当教員に対しては、今年の7月（前期末）に「大学での英語教育の在り方について」というテーマで意見交換会を開催し、十数名の教員との間で様々な意見交換を行った。クラスサイズに関しては、前期のクラスサイズを従来の約半分にした本年度の試みを支持する意見が圧倒的であることを確認した。主な意見を示すと以下のものであった。

<英語 I A : スピーキング・リスニング>

- ・授業運営が容易で、学生を積極的に授業に参加させる（英語をしゃべらせる）状況を作りやすい。
- ・一方通行の授業にならず、学生とコミュニケーションをとる割合が増えた。

<英語 I B : リーディング・ライティング>

- ・（指名する機会が増えたことなどで）学生が課題に取り組んでいるかどうかの確認が容易になった。
- ・受講生の人数が少なくなることで、添削課題において、丁寧な指導が可能となった。

これらの意見に見られるように、指導する教員の側では、従来の約半数（30名前後）のクラスサイズにすることの効果がより明確に実感されていることが確認できた。

【効果的な教材・指導方法についての検討】

大学の英語教育を行っていく上での効果的な教材・指導方法の検討を進めるにあたって、本研究では以下の2点を実施した。

・大学英語教育に関する公開講演および討論会
(2011年1月)

・意見交換会の開催：「大学での英語教育の在り方について」(2010年7月：前述部分を参照のこと)

まず、公開講演会においては、下記の2名の講演者にたたき台を提供していただき、活発な意見交換により、大学での英語指導における現状と課題、およびその解決法を検討した。

＜公開講演会：日本語母語話者が英語の基礎を(着実に)身に付けるために＞

◆英語学習において日本人の抱える問題点
Barbara Bourke 氏 (本学契約教員)

◆英語固有リズムの解析～リズム学習の大学英語教育への導入について～

上羽広明氏 (本学非常勤講師)

紙面の都合上、詳細は省略するが(詳細は、別途、教育推進研究費により作成する報告書(B5判80ページ：6月末配布予定)を参照のこと)、上記の講演では、主に以下の点が報告され、参加者との間で活発な討論が行われた。

- ・学生には、日本語と英語の相違点を明確に認識させる必要がある。(英語特有の母音・子音、リズム、文法等)
 - ・学生には十分な情報(言語的刺激)与える必要がある。
 - ・学習効果は、反復練習の量と学習時間に比例することを再認識して指導する必要がある。
- また、前述の本学英語担当教員(非常勤講師を含む)との意見交換会においては、本学の学生には真面目に学習に取り組む姿勢が強いので、指導内容を工夫することで、個々の学生の学習意欲を高め、より高い指導効果を上げることができるので

はないかという点で意見の一致をみた。一方、指導側の課題として、各科目(具体的には、英語ⅠA、英語ⅠB、および、英語Ⅱ(2年次選択科目))の間の関連性を検討し、1年次から2年次にかけての英語の指導内容について、体系的なカリキュラムを作成することが不可欠であることを確認した。なお、これまで一般的には(本学においても)、科目ごとに統一したテキスト等を指定し、指導内容の均一化を図ることの有益性が指摘されてきたが、我々の行った意見交換会では、テキストの統一による表面的な均一化よりも、指導教員間で(最低指導しなければならない)指導項目について共通の認識を持つことの方が重要であり、この点に関しては引き続き議論を継続し、具体案をまとめる方向で意見が一致した。

【必要最低限の指導内容についての検討】

前述の意見交換会での合意にもとづいて、英語担当の教員に対し、特に1年次の必修科目(英語ⅠA、英語ⅠB)において、最低指導しなければならない項目についてアンケート調査を行った。最終的な結論に関しては、引き続き検討を重ねていく必要があるというのが現状であるが、現在までのところ以下のような検討課題を確認している。

- ・必要最低限の文法事項(および構文)の選定
- ・必要最低限の修得語彙数の決定
- ・必要最低限の音声学についての指導事項(母音・子音の発音の仕方等)の選定
- ・辞書の効果的な利用法(語法・例文の活用法)についての指導方法の決定

これらの点に関して、今後も定期的に議論を重ね、最終的には、本学の英語指導に関する指導要領

(もしくは、ハンドブック等)を作成する予定である。

3. 結果及び考察

以上の結果として、以下の点を確認しておきたい。

<今回の調査結果と今後の進め方>

① 適正なクラスサイズについては、今回の調査結果だけでは、結論を出すことは容易ではないが、上記の調査結果において、少人数制の効果は(少なくとも指導側においては)確認することができた。2011年度も前期に関しては1クラス30名前後の人数でクラス編成を行う予定であるので、継続して少人数制の効果をより明確に確認し、最終的な結論を提示したい。

② 効果的な教材・指導方法、および必要最低限の指導内容については、今後も英語担当の教員間での意見交換を継続し、すでに述べたように、できる限り早い時期に、検討結果を「一般教育科の英語指導要領(あるいは、ハンドブック)」としてまとめることとする。なお、今回の研究では、本学の学生が英語学習に関しどのような目的意識を持っているかについても調査しているので、このような点も考慮し、最終的な指導方針を考えていく予定である。

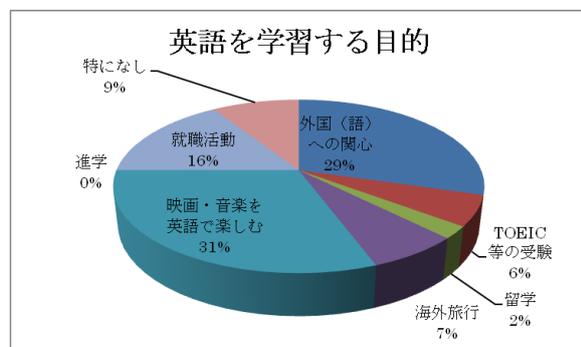


図9：本学学生が英語を学習する目的

<今後の課題>

今回の研究・調査において上記の①②を確認したが、上記の図9にも示されているように、学生が英語学習をする目的には、「外国(語)への関心」や「映画や音楽を英語で楽しみたい」といった純粋に教養の1つとして英語を身につけたいという希望の他に、就職活動や資格(TOEIC等)取得の対象と考えている学生も少なからず見受けられ、この点は最近の社会的な傾向とも一致しているように思われる。

このような点とも関連すると思われるが、今回の研究・調査において欠けている点として、学生の状況を客観的に把握する手段を検討する必要がある。今回の調査では、主にアンケート調査により検討を進めたが、すでに述べたように、アンケート結果には、(こちらの意図を必ずしも反映しない)学生の自己中心的な基準によるデータ(たとえば、「指名される回数が増えないクラスサイズを望む」等)が含まれるため、より客観的な判断基準を取り入れる必要がある。

また、学生の英語力の向上の度合いを客観的に把握するという点でも、定期的に英語力を確認できる共通テストなどを実施し、その結果を最適なクラスサイズ等を決定する根拠とする必要があると考えられる。たとえば、1年生全体を対象とした共通テストを作成(または、学内TOEICや、その他の業者テストを利用)し、前期と後期に1回ずつ受験させ、学習効果を把握する方法なども検討していきたい。

以上